

原著 (Article)

絵本活動を通して保育を広げる

——こども園3歳児クラスの実践——

**Expanding the world of childcare using picture books:
Kindergarten 3-year-old class implementation**

山本 美貴*

YAMAMOTO, Miki*

齋藤 善郎**

SAITOH, Yoshio**

摘 要

絵本の読み聞かせは、子どもたちの興味を惹きつけやすく、子どもたちが共通のイメージを持ちやすい。絵本の世界を保育活動として遊びに取り入れて継続的に展開していくことは、共通のイメージを基に、なりきり遊びやごっこ遊びをしていく中で、子ども同士が友だちと関わりを持ちながら成長していくことが期待できる。しかし、その実践報告は少ない。そこで、令和元年5月から9月の期間に幼・保連携型認定こども園3歳児クラス15名を対象として、絵本こぐまちゃんシリーズから広がる保育活動を行い、保育活動の内容と展開された保育活動に対する子どもの姿を記録し、この保育活動を通じて子どもたちがどのように成長したかを考察した。

キーワード：絵本，3歳児，絵本から広がる世界

Key words : Picture books, 3-year-old Children, expanded by picture books

1. 研究の背景と目的

絵本とは、絵を主体とした本である。絵本は、見る人を様々な世界に引き込み、楽しい気持ち、ドキドキハラハラする気持ちなど色々な気持ちにさせてくれる。また、絵本の中の絵からは色々な情報を読み取ることができるため、字が読めない幼児であっても楽しむことができる。保育現場における絵本は、環境のひとつであり、保育者が読み聞かせを行ったり、子ども自身が手に取って見たりと子どもにとって身近な物である。

豊橋才能教育こども園では、今までに、絵本『ぐりとぐら』(中川李枝子，山脇百合子作)や『おおきなかぶ』(A・トルストイ作)をテーマに物語に沿った運動会を実践したり、絵本『うみの100かいだてのいえ』(いわいとしお作)の物語を用いて製作活動を行うなど絵本の世界を保育活動に取り入れてきた。これらの活動は、子どもたちが意欲的に参加し、更に、子どもたちが保育活動の流れについて言葉で詳しく説明できることが印象的であった。

* 豊橋才能教育こども園 ** 梶山女学園大学教育学部

本論文は梶山女学園大学教育学部紀要の投稿・執筆規程2に基づき査読を受けた(2019年11月8日受付; 2019年11月27日受理)

保育活動を展開させるために絵本を用いることの有効性は、寺村ほか（1999）、伊東（2012）、徳永ほか（2019）が指摘している。寺村ほか（1999）は、絵本を使った保育活動として、5歳児の劇あそび『11ぴきのねことあほうどり』（馬場のぼる作）、3歳児の製作活動『スイミー』（レオ・レオニ作）、5歳児の童話から紙芝居を製作する活動を行った。伊東（2012）は、2歳児の子どもが読んでもらうことを催促する絵本『いないいないばあ』（松谷みよ子作）、『きんぎょがにげた』（五味太郎作）、『のせてのせて』（松谷みよ子作）、『ぞうくんのさんぽ』（なかのひろたか、なかのまさたか作）から発展させる遊びをまとめた。徳永ほか（2019）は、4歳児と5歳児に、絵本『まほうのでんしレンジ』（たかおまりこ、さいとうしのぶ作）から遊びに発展させる保育を行った。また、本やインターネットサイトにも絵本と保育を結びつけることを提案する内容が載っているが、実際に行った保育現場での活動や子どもたちの様子については明らかではなかった。絵本はどの園にも置いてあるであろう物で手に入れやすいが、絵本を保育活動に取り入れた実践報告は多くない。本実践では、絵本を題材に保育活動を広げることとし、その活動に対する子どもたちの反応を報告する。

2. 方法

3歳児クラスに於いて、絵本を題材に物語の世界に入り込んで進めていくことのできる保育活動を実践し、保育活動の広がり、子どもたちの姿を記録する。対象は、豊橋才能教育こども園の3歳児（山本美貴担当）15名（男7名、女8名）とした。

子どもたちの特徴としては、①友だちや保育者に対して優しい。②保育者の手伝いを積極的に行う。③友だちや保育者の動きをよく真似する。といった点が挙げられる。また、遊ぶことと絵本を見ることが好きで、泣いたり怒ったりしている子どもがいたとしても、それらの活動によって気持ちを切り替えられることが多い。遊びの場面では、1人が行う遊びに興味を持ち、その遊びが広がっていくことが多い。

3. 活動内容

5月から絵本こぐまちゃんシリーズ（わかやまけん作）を用いて保育活動を行った。その内容を表1に示した。

4. 子どもの反応

[5月]

親子遠足で動物園に出掛けたことから、園全体の活動として園内の壁や廊下を飾りつけて園内動物園を製作した。そして、動物園に興味関心を持つことができるよう、動物に変身して遊んだ。その中で、動物になりきっていると普段よりも子ども同士で

表1. 活動内容

	活動内容
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・動物ごっこ ・園内動物園の製作 ・絵本『こぐまちゃんとどうぶつえん』を見る ・工作紙と色画用紙で耳の製作 ・こぐまちゃん、しろくまちゃんになりきって園内動物園探検 ・耳を付けて朝の会を行ったり、トイレへ行ったりして過ごす
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本『しろくまちゃんのほっとけーき』を見る ・フライパン・泡立て器・ボウル・ホットケーキの玩具で遊ぶ ・冷蔵庫や卵の製作 ・料理ごっこ
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・調理（ホットケーキ作り）
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本『こぐまちゃんのみずあそび』を見る ・絵本『こぐまちゃんのどろあそび』を見る ・戸外で泥遊び、水遊び、プール遊び
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・料理ごっこ

関わる姿が見られた。言葉で話すよりも、体を動かして表現することで、自然に友だちと関わることでできていたようだった。

そのような姿から、園内動物園をただ周るだけではなく、何かになりきって周ることで、友だち同士の関わりが自然と生まれるのではないかと考えた。動物園の絵本はたくさんあったが、まだ集中できる時間は短いため、単純な物語を探した。また、なりきることを目的に人間以外の登場人物が出てくる絵本を探した。

こぐまちゃんシリーズの絵本は、短くて分かりやすい物語であった。さらに、シリーズになっており、動物園以外の活動へとも広がっていくと考え、選んだ。

絵本を読み聞かせすると、すぐに興味を持った。そこで、しろくまちゃんとこぐまちゃんの耳を用意した。それを見た子どもたちが意欲的になったところで耳を製作した。この日には作りたくない子もいたが、後日、みんなが耳を付けている姿を見て欲しくなったタイミングで製作をした（写真1）。製作した耳は、子どもが自由に手に取ることのできる場所へ置いておいたところ、朝から付ける子もいた。友だちが耳を付けている姿を見て、真似をして耳を付ける子もいた。多くの子が耳を付けたときには、みんなで園内動物園に出掛けることを誘うようにし、毎日のように園内動物園へ出掛けた。出掛ける前には、絵本の言葉を真似して、友だちや先生に「〇〇ちゃんは何の動物が見たい？」と尋ねるやりとりが広がっていた。また、こぐまちゃんのように友だちを誘い、手を繋いで関わりを持とうとする姿も見られるようになった。

絵本を見る時間には、こぐまちゃんシリーズの絵本を手に取り、友だちと一緒に見たり、絵から言葉を想像して読んだりしていた（写真2）。

耳を付ける時間が長かったため、保育者は、子どもたちのことを名前やクラス名で呼びかけるのではなく、「しろくまちゃん」と呼んで活動した。そうすることで、話

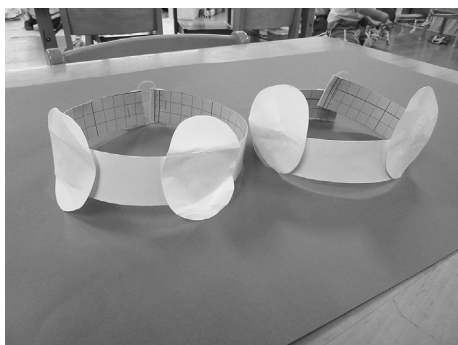


写真1 しろくまちゃんの耳



写真2 こぐまちゃんシリーズの絵本

を聞いたり、トイレへ行ったり、部屋から移動したりする際にも、なりきることを楽しみながら会話したり動きを付けたりして笑顔で過ごすことができていた。

〔6月〕

園生活に慣れ、周りの物へ目を向ける事ができるようになり、興味関心が広がってきたため、子どもたちのやりたい遊びも様々になった。中でも、耳を付けて遊ぶ姿ことはクラス共通の楽しい遊びとなっており、お気に入りの遊びになってきていることを感じた。

絵本『しろくまちゃんのほっとけーき』には、ホットケーキ作りの調理の様子が描かれており、ごっこあそびやクッキングの活動へと広げていくことができそうだと考えた。絵本『しろくまちゃんのほっとけーき』の読み聞かせをすると、エプロンや冷蔵庫や卵が必要だという意見が出た。また、それらの物を作ったらいいのではという意見も出た。そのため、子どもたちと必要な材料を考え、段ボールや画用紙をみんなで取りに行き、冷蔵庫と卵の製作を行った。エプロンは、保育で使用している個人用のエプロンを着た。いつもは絵の具あそびなどの衣服が汚れる活動のみ使用しているが、着てもいいことにした。

同時に、料理ごっこのイメージが広がるように、新しい玩具として調理器具とホットケーキを子どもたちに渡した。ボウルの中にブロックを入れ、泡立て器でまぜてからおたまで掬ってフライパンへ入れたり、フライパンの中にホットケーキを入れてひっくり返そうとしたり、椅子や床に座ってホットケーキを食べたり、絵本の絵のようにホットケーキを重ねたり、すぐに遊ぶ姿が多く見られた。

数少ない玩具へ子どもたちが殺到し、喧嘩になることもあった。すぐに増やすことのできないものについては、どうしたらよいか聞いてみると、貸し借りをしたらいいのではという意見が出たため、そのような場面には、「貸して」「いいよ」「あとでね」などのやり取りができるようになった（写真3）。

子どもたちが絵本を見ている場面では、文字は読めないが、絵を見ながら覚えていく文章を口に出していたり、先生の真似をして友だちに読み聞かせをしたりしている



写真3 料理ごっこ

こともあった。何人かの友だちと同じ本を一緒に見ることも楽しんでおり、貸してもらうのではなく、一緒に楽しもうとする姿が見られた。

[7月]

この時期には絵本『しろくまちゃんのほっとけーき』に親しみをもち、十分にイメージが広がっていた。そこで、調理活動をした。初めての調理活動であり、今回は混ぜることを楽しんで行う事、味や匂いを感じながらおいしく食べる事をねらいにして行った。

調理当日に絵本をもう一度読むと、子どもたちから「エプロンを着ないとね」という声があがり、意欲的であった。保育者が卵を手につくと、落とさないか心配する子、落とす真似をする子、割ってみたいという子がいた。今回は、数が少なかったため、保育者が卵を割ったが、みんなが注目しており、卵が割れると歓声が起こった。材料を入れて、泡立て器を順番に持ち、混ぜた。友だちが混ぜる様子を真剣に見つめ、ボウルが動いてしまうので、絵本のように、「誰かボウルを押さえていて」と呼びかける子もあり、しろくまちゃんになりきって友だちとの関わりを楽しむ姿が見られた。材料が混ぜ合わさっていくと、色が変化していくことや匂いに気付く子もいた(写真4)。



写真4 ホットケーキづくり

材料が混ざると園の給食室へボウルを運び、オーブンで焼いてもらった。子どもたちがびっくりするように、今回は一つの大きなホットケーキにして焼いてもらった。焼けてくるといい匂いが部屋まで漂ってきた。出来上がったホットケーキが部屋に届くと、部屋がいい匂いでいっぱいになった。近くへ寄って匂いを嗅ぐと、早く食べた気持ちになったようだった。切り分けると、手やフォークで触って柔らかさを感じ「ふわふわだ」と言って、周りの友だちと本当だと共感する姿が見られた。そして、笑顔でおいしく食べることができた（写真5, 6）。



写真5 出来上がったホットケーキ



写真6 みんなで食べよう

調理活動で達成感を味わい、自信をつけたようで、次は何を作ろうかと考える子どももいた。

[8月]

絵本『こぐまちゃんのどろあそび』や『こぐまちゃんのみずあそび』を見てから活動したことで、水や泥に対して抵抗なく触れることができていた。段ボールで作ったキッチンや玩具を戸外へ出すと、料理ごっこもしていた。

絵本のように泥団子を作って並べたり、泥でホットケーキなどの料理を作って遊ぶ子どももいた。

[9月]

ホットケーキ作りのごっこ遊びが続いていた。そこで、フェルトを切った物を出して、ホットケーキの生地のように使えるようにした。そうすると、牛乳の空き容器に白いブロックを入れて牛乳を入れる姿が見られた。その様子を見た他の子どもたちも興味を持ち、集まって一緒に遊び始めた。シートを敷いてその上に座り、ホットケーキを運んで食べる姿もあった。おもちゃ箱にこれらの玩具が入っているため、料理ごっこで遊ぶ姿が引き続き見られた（写真7, 写真8）。



写真7 料理ごっこ（混ぜる）



写真8 料理ごっこ（食べる）

5. 考察

絵本を使って保育活動を展開していったことによって子どもたちが成長したと感じた点としては、①ひとつの絵本をクラスみんなで見て共通のイメージを広げて遊ぶことで、子ども同士の関わりが自然と増えたこと。②身の回りの物事への興味関心が高まったこと。③自分の意見を言ったり、友だちの話を聞いたりする機会が増えたこと。以上の3点が挙げられる。

絵本を用いた保育活動を行うためには、絵本を選ぶことが必要であった。絵本を選ぶ際には、まず、図書館の検索システムやインターネットサイトでキーワードを打ち込んで調べた。そうすることで、沢山ある絵本の中から目的に合った絵本を知ることができた。そして、その中からその時の子どもたちに合うと考えた絵本を選んだ。寺村ほか（1999）と伊東（2012）は、絵本選びの重要性を述べている。寺村ほか（1999）は、「保育活動に発展させやすい絵本とそうでない絵本がある。」とし、保育活動に発展させやすい絵本の特徴として、「①くり返しのあるもの ②ストーリーに変化のあるもの ③日常生活とかけはなれたもの」と述べている。伊東（2012）は、「絵本には色々なジャンル、内容があり、遊びに結びつく絵本と遊びには向かない絵本がある。好奇心を刺激する活動的な内容の絵本が遊び向きのように思う。」と述べている。このように、絵本を用いて保育活動を展開するにあたって、保育者は、絵本を選ぶための方法や、どのような絵本が活動に適しているかを知っておくことが必要だと考える。

堤ほか（2008）は、「子どもが絵本の世界で遊び、疑似体験することで、現実の世界に良い影響を及ぼし、子どもの「生きる力」を育み、心豊かな生活を送ることができる糧となる。」と述べている。今回の活動の中でも、料理ごっこは特に長期的に展開されていったことから、絵本『しろくまちゃんのほっとけーき』のような、食べ物の絵本は子どもたちにとって魅力的であり、保育を広げていく活動に適していると考ええる。

伊東（2012）は、絵本に対して子どもが興味を示すタイミングを見逃さないよう

に、即時に身近な用具を使って遊びを継続・発展させることが重要だと述べている。本実践でも、絵本を読み聞かせしてから、なりきりあそびを提案したり、絵本に出てくる物を子どもたちに提示したり、製作活動を行ったりすることで、活動が広がっていった。つまり、絵本の読み聞かせを行うだけではなく、何か子どもたちの気持ちが盛り上がる保育活動を保育者が計画し、行うことから、子どもたちと一緒に保育活動を広めていくことができると考える。

■参考文献

- 寺村輝夫・渡辺めぐみ（1999）保育現場における絵本の役割（その3）. 文京女子大学研究紀要, **1**(1) : 113-127.
- 伊東久実（2012）絵本から発展させる遊び. 身延山大学仏教学部紀要, **13** : 57-65.
- 徳永加代・岡澤哲子（2019）幼小連携につながる保育実践プログラムの開発—絵本から「遊び」に発展させる事例を通して—. 帝塚山大学現代生活学部子育てセンター紀要, **4** : 49-57.
- 堤千代子・森恵子・永島倫子・菅淑江（2008）絵本の中の食育. 中国学院紀要, **7** : 177-188.